

幡多郡のアクセント

— 渭南・幡西地区を中心に —

土 居 重 俊

(高知大学教育学部 国語研究室)

渭南地方の代表として、清水市清水町のアをとりあげてみる。中村市中村町と全く同系統のものであることは、今更いうまでもないが、部分的には若干異なる点がある。

- ① 名詞一音節語第一類「柄・蚊・氣・子・巢……」に助詞(ガ・ン・ワ・モ・エ……)をつける、 $\underline{\text{Q}}\check{\text{V}}$ (下中)となる。
- ② 第二類「毛・名・値・葉・齒……」に助詞をつけた場合も、 $\underline{\text{Q}}\check{\text{V}}$ となる。但し「齒・双」は共に $\overline{\text{A}}\text{G}$ 。
- ③ 第三類「繪・尾・木・粉・酢……」に助詞をつけた場合は、 $\overline{\text{O}}\check{\text{V}}$ 。
- ④ 二音節語第一類「鈴・牛・梅・顔・柿……」が、 $\underline{\text{Q}}\text{O}$ 。
- ⑤ 第二類「石・上・音・紙……」が、 $\underline{\text{Q}}\overline{\text{O}}$ 。
- ⑥ 第三類「足・池・犬・色・腕……」も、 $\underline{\text{Q}}\overline{\text{O}}$ 。もつとも「指」は、中村町と同様 $\overline{\text{O}}\text{O}$ であるが、「靴」は $\overline{\text{O}}\text{O}$ となる。(中村では $\underline{\text{Q}}\check{\text{V}}$ 。)
- ⑦ 第四類「跡・粟・息・板・糸……」が $\overline{\text{O}}\text{O}$ 。
- ⑧ 第五類「赤・秋・朝・汗・雨……」も、 $\overline{\text{O}}\text{O}$ 。
- ⑨ 「三音節語第一類「霞・形・鱈・着物・車……」が、中村式の $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ や宿毛式の $\underline{\text{Q}}\text{O}\text{O}$ (宿毛市宿毛町では、 $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ 型に発音するものもある。)とも異つた $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ となる。助詞がつけば山が助詞にすべる。カスミガ・カタチガ……など。
- ⑩ 第二類「^{あいな}間・小豆・えくぼ・毛拔・釣瓶・とかげ・むかで……」において、「えくぼ」が $\overline{\text{O}}\text{O}$ となる外は、すべて $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ 。助詞がつけば、アイダガのほかは、アヅキガ・ケネキガ……のように元のアの山を保存する。
- ⑪ 第三類「あわび・力」が、 $\underline{\text{Q}}\overline{\text{O}}\text{O}$ ・ $\underline{\text{Q}}\overline{\text{O}}\text{O}\check{\text{V}}$ 。
- ⑫ 第四類「頭・男・表・女・鏡……」において、「刀・劍」が、 $\underline{\text{Q}}\overline{\text{O}}\text{O}$ で、ほかの語は $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ 。助詞がつけば、「蓆」が $\overline{\text{O}}\text{O}\text{O}\check{\text{V}}$ で、他は $\overline{\text{O}}\text{O}\check{\text{V}}$ 。
- ⑬ 第五類「朝日・命・胡瓜・心・姿……」が、すべて $\underline{\text{Q}}\overline{\text{O}}\text{O}$ ・ $\underline{\text{Q}}\overline{\text{O}}\text{O}\check{\text{V}}$ 。
- ⑭ 第六類「兎・鰻・烏・狐・雀……」において、「烏・たぬきが」、 $\overline{\text{O}}\text{O}\text{O}$ ・ $\overline{\text{O}}\text{O}\text{O}\check{\text{V}}$ となり、「高さ」が、 $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ ・ $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}\check{\text{V}}$ となるほかは、ウサギ・ウサギガの如く $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ ・ $\overline{\text{O}}\text{O}\text{O}\check{\text{V}}$ となる。
- ⑮ 第七類「^{しほ}苺・後・蚕・かぶと・鯨……」において、「苺・蚕・薬・盟」が、 $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ ・ $\overline{\text{O}}\text{O}\text{O}\check{\text{V}}$ 。「便り」が、 $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ ・ $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}\check{\text{V}}$ 。「後・かぶと・鯨・椀・病」が、 $\overline{\text{O}}\text{O}\text{O}$ ・ $\overline{\text{O}}\text{O}\text{O}\check{\text{V}}$ 。「病」は $\underline{\text{Q}}\overline{\text{O}}\text{O}$ 「蚕」は $\overline{\text{O}}\text{O}\text{O}$ とも。)
- ⑯ 動詞二音節語第一類「行く・置く・押す・貸す・買う……」が、 $\underline{\text{Q}}\text{O}$ 。
- ⑰ 第二類「書く・勝つ・切る・食う・来る……」が、 $\overline{\text{O}}\text{O}$ 。
- ⑱ 第三類「居る」が、 $\underline{\text{Q}}\text{O}$ 。
- ⑲ 三音節語一段活第一類「開ける・当てる・植える・変える・消える……」が、 $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ 。
- ⑳ 第二類「受ける・起きる・落ちる・掛ける・詰める……」が、 $\underline{\text{Q}}\overline{\text{O}}\text{O}$ 。
- ㉑ 四段活第一類「上がる・当たる・浮ぶ・歌う・送る……」が、 $\overline{\text{O}}\text{O}\overline{\text{O}}$ 。

- ⑳ 第二類「余る・祈る・怨む・起す・落す……」が $\bar{O}\bar{O}O$ 。
- ㉑ 第三類「遊ぶ・歩く・隠す・入る・参る……」が $\bar{A}\bar{O}\bar{F}\bar{A}$ ・ $\bar{H}\bar{A}\bar{I}\bar{L}$ ・ $\bar{M}\bar{A}\bar{I}\bar{L}$ ・ $\bar{A}\bar{L}\bar{K}$ ・ $\bar{K}\bar{A}\bar{K}\bar{S}$ 。
- ㉒ 四音節語第一類「固まる・転がる・養う・生れる・重ねる……」が、 $OOO\bar{O}$ 。
- ㉓ 第二類「動かす・ほしがる・集める・調べる・倒れる……」において、 $\bar{A}\bar{U}\bar{M}\bar{E}\bar{L}$ のほかは、すべて $OOO\bar{O}$ 。
- ㉔ 第三類「答える……」が、 $OOO\bar{O}$ 。
- ㉕ 形容詞二音節語「よい・無い……」が $\bar{O}\bar{O}$ 。
- ㉖ 三音節語第一類「赤い・浅い・厚い・甘い・薄い……」が、 $OO\bar{O}$ 。
- ㉗ 第二類「曇い・黒い・白い・高い近い……」が、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。
- ㉘ 四音節語第一類「明かるい・あぶない・悲しい……」が $OOO\bar{O}$ 。(「あぶない」は $OOO\bar{O}$ とも。)
- ㉙ 第二類「嬉しい・くわしい・涼しい……」が、 $OO\bar{O}$ 。

以上のとおりであるが、二音節の下中 $\bar{O}\bar{V}$ や $\bar{O}\bar{O}$ を全平に言う者もある。これらの者によれば $\bar{O}\bar{O}$ ・ $OOO\bar{O}$ は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ となる。七名のうち下中組四名、全平組三名であった。

清水市下川口町でも、①②④などの語いを下中に言う者と、全平に言う者とが両存する。前者のアクセントでは、名詞三音節語が清水町のそれとやや異なり、⑤の「霞」以下すべて、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ となる。⑩は、 $\bar{E}\bar{K}\bar{P}$ を除き、他は單獨ではすべて $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。然るに助詞をつけると、 $\bar{A}\bar{I}\bar{D}\bar{A}$ ガ、 $\bar{A}\bar{Z}\bar{K}\bar{I}$ ガのようになる。「毛拔・釣瓶・とかげ・むかで」なども、それぞれ單獨では、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ であるが、助詞がつけば、第三音節が隆起する。⑫は「刀・剣」が、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ となり、「席」が、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ となるほかは、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $OOO\bar{V}$ となる。⑬は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ⑭は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ⑮は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ となることはいうまでもない。

上は下川口町貝の川に於ける調査であるが、同町宗呂・鳥淵あたりでは、①②④などの語いを全平という傾向が強い。

月灘村の中村部落は、姫の井であるが、ここでも①②④などの語いを、下中にいうものと全平にいうものとが相半ばする。然し同村樫の浦・春遠・才角・小才角などでは、全平の傾向が極めて優勢である。

月灘村樫の浦のAは次の如くである。

①②共に、 $\bar{O}\bar{V}$ (但し $\bar{H}\bar{A}\bar{G}\bar{A}$ (ン)(齒・双)) ③は、 $\bar{O}\bar{V}$ 。④は、 $\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 。⑤⑥共に $\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 。(但し $\bar{R}\bar{A}\bar{T}\bar{S}$ ・ $\bar{Y}\bar{U}\bar{B}\bar{I}$) ⑦⑧は、 $\bar{O}\bar{O}$ 。⑨は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 。⑩は、 $\bar{E}\bar{K}\bar{P}$ を除き、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。助詞がつけば、「間」が $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 「小豆・毛拔・釣瓶・とかげ・むかで……」が、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 。⑪は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 。⑫は、「刀・剣」が、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ で、ほかの語は $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。助詞がつけば、「席」が、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 。他は $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 。⑬は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 。⑭は、「鳥・狸」が、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ となり、「高さ」が、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ となるほかは、 $\bar{U}\bar{S}\bar{A}\bar{G}\bar{I}$ ・ $\bar{U}\bar{S}\bar{A}\bar{G}\bar{I}$ ガのように、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ となる。⑮は、「毒・薬・盃」が、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 。「後・蚕・かぶと・鯨・便り・椿・病」が、すべて $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ ・ $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{V}$ 。⑯は $\bar{O}\bar{O}$ 。⑰は、 $\bar{O}\bar{O}$ 。⑱は、 $\bar{O}\bar{O}$ 。⑲は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。⑳は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。㉑は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。㉒は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。㉓は、 $\bar{A}\bar{U}\bar{F}\bar{A}$ ・ $\bar{H}\bar{A}\bar{I}\bar{L}$ 。「歩く・隠す・参る」が、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。㉔は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。㉕は、 $\bar{A}\bar{U}\bar{M}\bar{E}\bar{L}$ のほかは、すべて $OOO\bar{O}$ 。㉖は、 $OOO\bar{O}$ 。㉗は、 $\bar{O}\bar{O}$ 。㉘は、 $\bar{O}\bar{O}\bar{O}$ 。㉙は、 $OOO\bar{O}$ 。㉚は、 $OOO\bar{O}$ 。

大内町竜が迫(タツガサコ)や宿毛市小筑紫町のAも、上のAと一致する。(⑮については若干異がある。) 竜が迫では八名につき調査したが、①②④などの、語いを下中型でいう者は一人も無かつた。然し大内町弘見では、下中と全平が両存するし、結局廣く清水市・月灘村・大内町・宿毛市に属する地域いわゆる渭南幡西地区では、下中と全平が混在しているという事実は、動かしがた

いものようである。

幡東地区(特に伊田岬附近)のアクセント

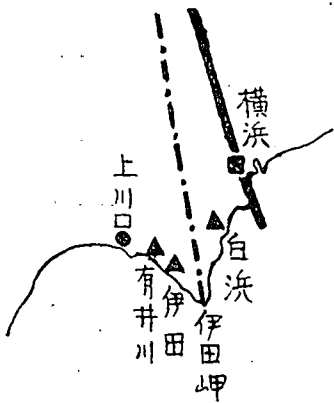
白田川村井の岬(伊田岬)附近のアについては、「国語学」第十六集にその一斑を記しておいたが、一應白田川村上川口・有井川・伊田・白浜および佐賀町横浜のアを比較検討することとする。

部 落 語 例	上 川 口	有 井 川	伊 田	白 浜	横 浜
① 柄・蚊・気	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>△</u>
② 齒	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>
③ 絵	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>
③ 木・田・手	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>	○ <u>▽</u>
④ 飴・牛・梅	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>
⑤ 石・歌・音	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>
⑥ 足・池・犬	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>
⑦ 跡・息・板	{ ○○ ○○ <u>▽</u> (○○ <u>▽</u>)	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>
⑧ 秋・朝・汗	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○・○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>	{ ○○ ○○ <u>▽</u>
⑨ 霞・形・鏝	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>
⑩ 頭・男・表	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>
⑩ 朝日・命・ 胡瓜	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>	{ ○○○ ○○○ <u>▽</u>
⑩ 行く・置く ・押す	○○	○○	○○	○○	○○
⑩ 書く・勝つ ・切る	○○	○○	○○	○○	○○
⑩ 開ける・当 てる	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
⑩ 受ける・起 きる	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○

㉑	上がる・当 たる	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
㉒	余る・折る	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
㉓	歩 く	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
㉔	固まる・転 がる	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
㉕	動かす・ほ しがる	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
㉖	答 え る	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
㉗	よい・無い	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
㉘	赤い・浅い ・厚い	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
㉙	髷い・黒い ・白い	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
㉚	明かるい	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
㉛	嬉 し い	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇

上川口のアは、大方町や中村市中村町のそれと一致する。㉗の語いに助詞の接続した場合だけがやや異なるが、六名調査した中で、一名は、中村式に〇〇▽の型であった。上川口・有井川・伊田・

第一図



—— 私見による境界線
- - - 従来の境界線

白浜の▽(助詞)は、ガ・ン・ワ・ニ・モ・エ……どれもあてはまる。たとえば「柄」の場合、上川口ではエガ・エモ・エエであり、伊田では、エガ・エモ・エエである。然るに、横浜ではエガ・エモ・エエとなり、「ガ」は平につづき、「エ」「モ」はさがつてつづく。即ち高知アと一致する。「飴」の場合も同じ関係が成立する。横浜アの①②④⑤⑥⑩⑪⑫⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗の型は、完全に高知と一致する。中村と完全に一致するのは、②③⑦だけである。(③も「繪」だけ。)佐賀町横浜と佐賀町佐賀とは大差は無いし、一般に佐賀町アは幡多郡に属しながら、著しく高知型であることが了解される。この点につき、中平悦齋氏が、佐賀町を『音調からいえば東京に属する。』とされている(「方言」一の一、五頁)のは、『音調からいえば高知に属する。』と修正すべきであろう。

有井川——伊田——白浜を連ねる地帯は、折衷ア地帯であり、上川口(中村型)と横浜(準高知型)とアの型を共有している。有井川は、個人差が相当有るが、アの型は上川口に近い。伊田、白浜は、横浜と一致する語群(④などは便宜上助詞をつけぬ場合とつけた場合とにわたる。)9に対し、上川口と一致する語群23である。ゆえに伊田・白浜は中間地帯ではあるが、有井川と共に中村型の性格を相当持つていることがわかる。而して伊田と白浜とのアは、

第二図



全く同一である。ちなみに「国語学」第十六輯において、これらの地帯で、ウミオミル(海)などの型が聞かれる旨を述べたが、ウミオミルの型も聞かれるのである。(これなども音声学的には、ウミオミル、音韻論的には、ウミオミルというのが正しいかもしれない。)

さて高知県における東西アの境界線は、海岸地帯では、伊田岬によつて引かれるべきことが中平氏によつて想定され、平山先生もこれを踏襲されているようである。今、これら先覺の士に対し異論を唱えるのは、心苦しい次第であるが、私見としては、伊田岬から更に東へずらして佐賀町横浜に引きたい。(「国語学」第十七輯一〇四頁の附図の海岸地帯におけるア境界線上に横浜が、もれていたなのでこれを入れて、第一図のようにしたい。)

参考までに、かつて平山先生が発表された境界線を示しておく。(第二図)(平山輝男『四国アクセントとその境界線』音声学協会会報昭和十五年十一月号一〇頁)境界線の設定が、私見と若干相異なるのは、時代のズレということも起因していることと思われる。言語は元來変化するものであり、今日の言語境界線必ずしもそのまま十年乃至二十年後の境界線とはならぬ場合もあると思われるからである。

(昭和30年9月30日受理)

